

【高等学校における介護福祉士養成の現状と課題】

文部科学省の辻本智加子先生をお迎えして、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方および「深い学び」を実現するための分かりやすい学習指導要領に向けた工夫についてご講演いただきました。

今回の講演では、これからの福祉教育に求められる学びの在り方について、「自らの人生を舵取りする力」を育むことの重要性について学びました。特に、福祉教育を通して「学びに向かう力・人間性」を育み、「好きを育み、得意を伸ばす」視点から、福祉科の各科目を関連付け、知識と技術を統合した深い学びにつなげていくことが重要であるとのお話がありました。教科等横断的な学びについて、一つの対象を複数のレンズで捉えることで、物事の見方や考え方を広げていくことの大切さについて改めて考えることができました。また、これからの福祉科では、実践的・探究的な学習を一層充実させ、一人ひとりの生活やニーズを踏まえて問いを見だし、科学的な根拠に基づいてよりよい解決や創造的な支援を追究することが求められることを学びました。福祉の専門性を生かしながら、社会の一員として地域共生社会の実現に向けて考え、職業人として自ら成長していく力を育てることが重要であると理解しました。

今回の講演を通して、高校における福祉教育は、知識や技術を身に付けるだけではなく、生徒が自ら問いを立て、考え、他者と協働しながら学びを深め、その学びを実際の介護や地域社会につなげていく教育であることを改めて認識する機会となりました。

【根拠に基づいた介護実践のために】

コニカミノルタ株式会社の関泰彦様より、介護現場におけるテクノロジーの活用や生産性向上、科学的根拠に基づく介護についてご講義いただきました。技術を活用した取り組みの一つとして、見守り機器「HitomeQ（ひとめく）ケアサポート」などが開発されていることについてご紹介いただきました。

介護業界では、今後さらなる人材不足が見込まれており、国においても介護ロボットやICTなどの介護テクノロジーの活用が推進されている一方で、介護テクノロジーの普及は十分とはいえず、課題もあることが示されました。しかし、機器を「導入すること」と「活用すること」は異なり、導入だけでは期待する効果につながらないことについてお話がありました。効果的な活用のためには、まず現場の状況や課題を理解し、活用を進めるためのチームづくりやマネジメント力を確保し、試行錯誤を繰り返しながら取り組みを積み重ねることで、徐々に成果や効果が見えてくることが示されました。

24時間365日の生活状況を継続的に把握することで、これまで見えなかった部分の情報をも収集し、利用者一人ひとりのデータを根拠として個別ケアにつなげていく「デジタル介護過程」ともいえる考え方が示され、テクノロジーが介護過程そのものを支援する可能性について考える機会となりました。

今回の講義や個人ワーク、グループワークを通して介護テクノロジーの活用は、介護現場が抱えている課題を明確にし、その課題を解決するための手段として活用することが重要であることを改めて認識しました。介護現場だけでなく、介護福祉士養成校においても介護テクノロジーに関する教育を取り入れ、将来の介護現場を担う生徒がテクノロジーを適切に選択・活用し、より良い介護を考える力を育成していく必要性について考える貴重な時間となりました。



【高校福祉科の授業展開について（マイスターハイスクール報告）】

愛知県立古知野高等学校教諭の高木涼先生から、「高校福祉科の授業展開について」というテーマでマイスターハイスクール報告をしていただきました。

DX時代をリードする高度介護人材の育成について、「愛知から始まる高校福祉の新潮流」をテーマに、科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践や、課題解決型学習（KOCHINO PBL）の推進について詳しくお話しいただきました。課題解決型学習を進める上では、自分たちのやりたいことを中心にするのではなく、地域のニーズや課題を捉え、それを学習につなげていくことが大切であるとの説明がありました。

マイスター・ハイスクール（MHR）の取り組みを実現するため、学習内容の重複を整理し、各科目の役割を明確にするとともに、これまでのテストや評価の在り方についても見直しをしたというお話がありました。また、単に介護福祉士の資格取得を目指すのではなく、生徒の中に「介護福祉士を目指したい」というマインドをつくり、資格の価値を高める授業を行うことが重要であるというお話が印象に残りました。

実践事例として、「歩行測定によるデータ分析からの気づき」「眠りスキュンのデータ結果から生徒が感じたテクノロジーとの向き合い方」「認知症カフェの立ち上げから試行錯誤を通じたレジリエンスの育成」「認知症VRコンテンツの開発からみえる専門性を越えて生まれる学びの価値」の4つの事例について報告いただきました。それぞれの実践を通して、成果物そのものを重視するのではなく、生徒が考え、試行錯誤するプロセスこそが重要であるということを理解することができました。また、単なる活動経験の積み重ねと、生徒の価値観の変容は必ずしも比例するものではなく、活動の中で生じる「ゆれ」や「葛藤」も、価値観が変容していく過程の一部であることについて学びました。すべてを必ずしもプラスの結果に導くのではなく、生徒自身が悩み、考え、試行錯誤する過程を大切にすることが重要であると考えることができました。

今回の内容を通して、生徒を育てるのは教師だけではなく、学びを支える環境設計そのものが授業づくりの重要な一部であり、福祉科教員自身も生徒にとって身近な「教育環境」として、福祉の在り方を示すモデルになることを学ぶ、大変有意義な機会となりました。

